「アルプ」創刊号冒頭４頁の紙型、創文社の指示で精興社で保管、現在は北のアルプ美術館で保管されている。p27の上部の誌面は実際に刷られたもの。

夢の荒野を駆ける

『アルプ』博物誌　創文社と精興社をめぐる

串田孫一は雑誌編纂が好きな人であった。

謄写版刷の同人雑誌『流星』を出したのが十四歳、十六歳で山の紀行集『山岳』を出し、詩と散文集を集めた『薄雪草』は二十二歳、大学院時代『哲学雑誌』を編纂し、戦中には矢内原伊作、福永武彦、戸板康二らを同人として『冬夏』を十字屋書店から発行し、戦後は文庫サイズの『アルビレオ』、東京外国語大学の山岳部ＯＢの三宅修や大谷一良らと『まいんべるく』という季刊誌を創刊していった。

雑誌を編集し、自らの発露による思いを繋げる原稿を書くこと、

一貫したテーマは路傍に忘れていた大切なもの、

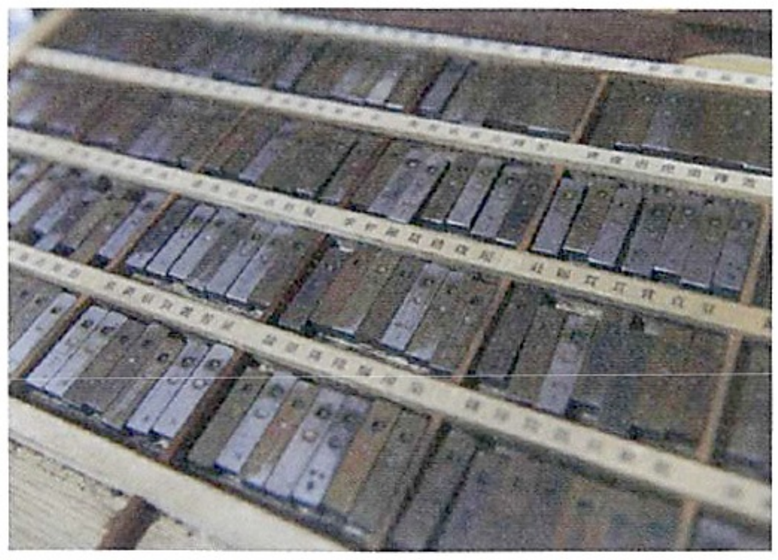
串田孫一は知と美を読者へ響くように一つひとつ拾遺していった。

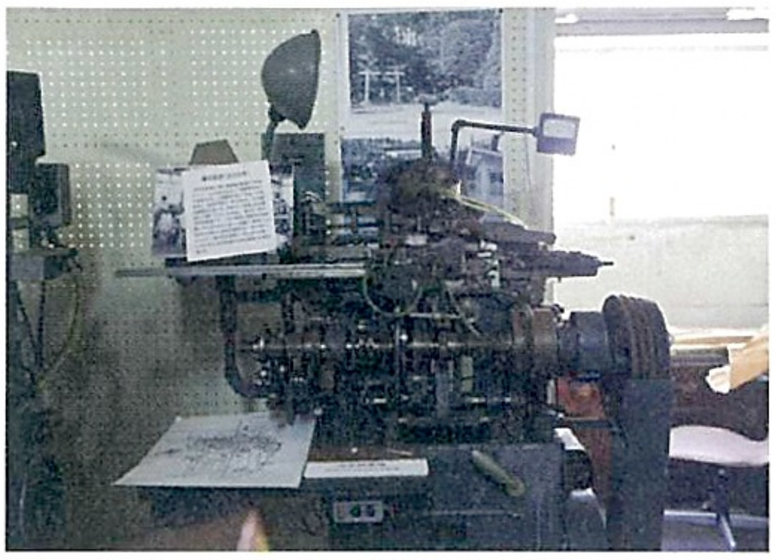
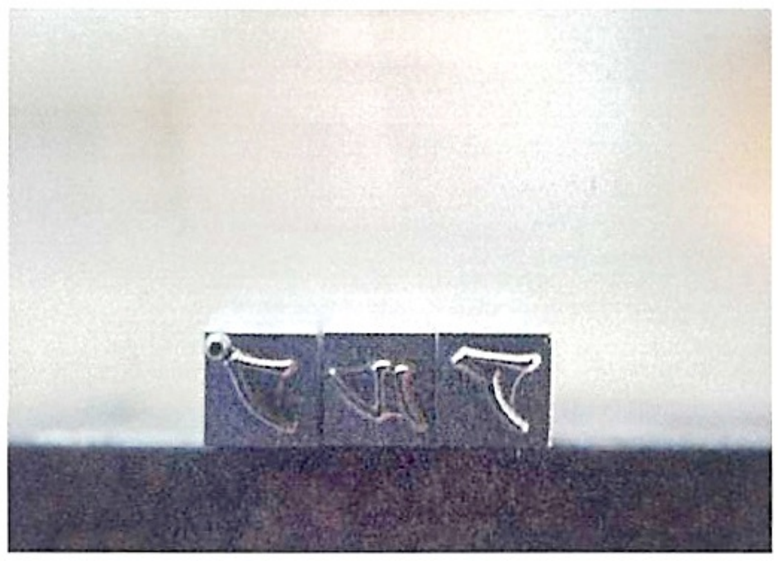
写真＝朝岡英輔

一九五八年三月創文社から『アルプ』が創刊された。創文社創業者久保井理津男は自伝『一出版人が歩いた道』でこう記している。

「或る夜、私が文芸誌発行の夢を見て、翌日それが串田先生のところに持ち込まれ『アルプ』創刊になったのだと実しやかに伝えられているが、そんな簡単なものではない。串田先生はもともと哲学専攻の学者であるが、『博物誌』やその他の著書の刊行で私は非常にしたしみを感じた。大新聞の広告費が次々に高くなり、広告が簡単にうてなくなって来ているのと、その効果の程にも疑問を感じていたので、ＰＲ誌をつくり、串田先生に毎月五〇〇〇字ぐらいの短文を書いていただき、一年に一冊宛の単行本をつくるようにしたらどうか」

創文社は一九五一年創業のトマス・アクゥナス『神学大全』全訳四十五冊や、『ハイデッガー』全集を刊行する学術書中心の出版社で、串田の随想集『砂時計と寝言』などの単行本も刊行していた。『アルプ』は創文社のＰＲ誌として期待されていた。『アルプ』二四一号に掲載された「串田孫一の『アルプ』創刊準備の頃」にはその経緯が詳細に記載されている。当初雑誌のタイトル候補には『自然林』や『草本帯』などの日本語と同時に『アルプ』があった。名付けたのは尾崎喜八、アルプとはスイスアルプスで夏の放牧場となる高地草原のこと。山を登る哲学者串田孫一と自然への共感を込めて謳う詩人尾崎喜八の精神的な支柱が『アルプ』に深く刻まれていく。串田は『若き日の山』『山のパンセ』『山の絵日記』など山の随想集を三冊刊行



していた。自然に対する深い叡智によって表現された山行、機は熟していたのだ。

三〇〇号に三宅修の創刊号の回想が掲載されている。

「串田さんの名著『博物誌』の第一巻はその大洞（正典、創文社編集長※編集部註）の代表の一つだと思うが、活字の選択も行間の余白も、すっきりして少しの無駄もなく、カットの大きさも配置の場所も、これ以外にはないという所まで昇華している。『気品』の漂う本造りである。

『アルプ』では、その才腕が存分に発揮され、目の前で一冊の雑誌が体裁を整えていくプロセスを見ることができた。

本文の紙一つでも充分に吟味し、分厚い何冊もの見本帖を繰り三菱の特漉にしなければ、とか、表紙は特に厚手のものにローラーをかけて『アルプ』だけのものを創り出し、印刷もきれいな活字と刷りと、そして費用でも業界随一の精興社へと、つまり尾崎喜八・串田孫一という個性と芸術とを最大限に表現できる舞台装置を一分の狂いもなく仕上げていくのである」

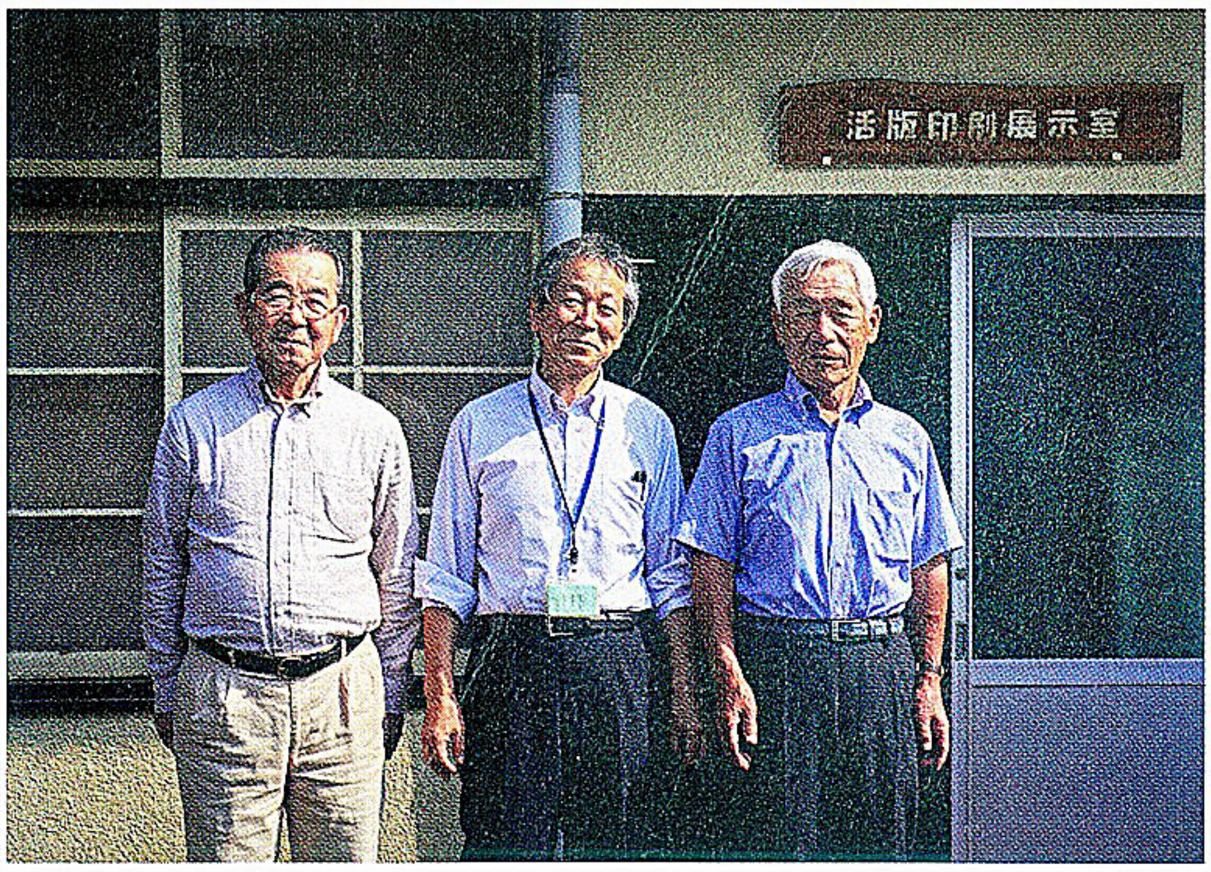
創刊号は大谷一良の版画が表紙を飾った。

精興社の印刷、その特徴は何より精興社書体といわれる活字、細身で、明晰な表情を持つ明朝体にあった。『アルプ』が刊行された一九五八年三月から一九八三年二月号までの二十五年間、活版印刷は精興社が担当した。活版印刷とは金属活字を用いて、文章を誌面に刷る方法。主な要素は版、紙、インキ。版は形状として凸であった。雑誌完成まで印刷工程はいくつかの過程を経ていく。当時精興社で現場を担当した古曳與仙、細谷武男、小山成一を青梅に訪ねた。彼らは営業、印刷現場とそれぞれ違った部署で『アルプ』を作っていたスタッフだった。精興社書体は活字彫刻師君塚樹石によって作られた書体である。

国語学者大野晋は「やや細身の鋭い字体――いわゆる精興社書体で組み上げられた本文は実に美しかった」と言う。

一九一三年、精興社創業は神田美土代町から始まった。一九三〇年には君塚樹石による活字の電胎母型が完成、この年青梅市の根ヶ布に整版印刷工場を展開し、一九四五年には戦火によって神田の工場が焼失し主な機能を青梅に移していった。

古曳は一九五八年に入社、手差し活版印刷の現場を経て内校正を担当し、その後営業として神田に配属された。最初の仕事は二十六歳の時、古曳も山



青梅にある精興社の本社の建物脇にある活版展示室。精興社活字も並べられて活版印刷の行程が展示されている。向かって左から古曳氏、小山氏、細谷氏。

登りが好きだったこともあり『アルプ』の創刊を喜びを持って迎えたという。頁を開き山の道具の広告も山の案内もないことに驚いたという。都電の運賃が十三円の時代に『アルプ』は定価八十円で発売された。創刊号は初版三千部、四版を数え合計一万二千部だった。綴じも絲縢り、紙は三菱の特漉きでインキのノリもむらがなく毛羽立つのを嫌い圧縮をほどこしていた。表紙は活版の三色刷り、本文は六十八頁。平台片面十六頁で刷っていた。その美しい『アルプ』のレイアウトの詳細を小山に訊いた。

〈1段組　縦9ポベタ　49字×18行　行間9ポ全角　天地版面441ポ　左右版面315ポ〉

〈2段組　縦8ポベタ　26字×20行　行間8ポ全角　段間8ポ3倍　天地版面440ポ　左右版面312ポ　天地1ポ差はケシタに出し　天ソロイ、左右3ポ差はノドにすて小口ソロイ〉

「雑誌では珍しく創文社様からの指示で紙型を取っておいたことによって重版印刷ができた。ある意味先見の明ですね」と古曳は言う。

紙型とは活版の保存システム。活字で組まれた版を直接用紙に印刷する原版刷りは稀で校了にいたった段階で「紙型」取り作業を行った。紙型を保存しておけばそこから鉛版を鋳込み何回も同一の組版を印刷することができる。紙型はドライマット紙を使用して二部とり、一部は印刷用に、もう一部は訂正個所の修正のための保存だった。訂正部分は象嵌組紙型を作成し対応した。紙型の裏貼り作業はすべて手作業で行われ、その後の鉛版印刷でのていねいなムラトリ作業と相俟って、印刷の活字の流れるような美しさに反映されていく。

『アルプ』の原稿は一回で全頁まとめて入稿された。その進行の完璧さに大洞たちの編集才腕の冴えが伺える。

「出張校正の時には串田はベレー帽をかぶり山旅のビブラムソールの靴で青梅に来た」と古曳は言う。気もそぞろ、早く校正を終えて串田の気持ちは奥多摩の山に向かっていたのだ。

細谷は一九五五年入社、鋳造を作る現場で母型活字を造り文選を担当してきた。スダレといわれる棚の前で一文字ずつを拾う。一箱9ポなら千八百十本の活字が組まれる。文章は岩波書店の古典から海外文学、思想、神学まで、と作家の手書き原稿は難易度も高く悪筆もあり幅広い。現場のメンバーはほとんどが女性。内校という精興社の独特のゲラ出校までの事前チェックで、より完璧に近いものを出していく。

縦にしてまっすぐに見えるように、文字は母型から鋳造段階でわずかだが成形を加える時もある。例えばひらがなで一番使う文字が「の」という字、少し斜めにして流れるような意匠がされている。文字は縦の線を強く並べるとまばらになりがちなのでそれを文字の「よりひき」によって調整する。正方形の一枠、ひらがなは中心に置く字がひとつもなかった。精興社書体の細身の独特の美しさは流れるような配慮がされた技なのだ。活字は紙型を取ると一回ずつ使い捨てる念の入れよう。活版独特と思われた印字の際の紙の盛り上がりはむしろ不良品なのだと知った。

表紙の『アルプ』というロゴは何度も使うので銅板で作られた。しかし号を重ね、創刊当時と最終号では『アルプ』のルという文字のレのハネが違っている。作り直したものだ。それが二十五年の歳月の雫が削った路傍の石のように堅牢に思えた。魂の交歓、編集者だけでなく作家だけでなく画家だけでなく、工員の思いもそこに刻まれる。夢の原野を分け入る。広範な博識、行為に裏付けられた創造の広がりが、まさに雑誌の面白さだと串田孫一は知っていた。

参考文献
『「アルプ」の時代』山口耀久／山と渓谷社
『活字の世紀』田澤拓也／精興社ブックサービス
『活版印刷技術調査報告書』青梅市教育委員会
『一出版人が歩いた道』久保井理津男／創文社